次ページへ続く

Continued on next page...

芸能関係資料の調査収集について

――利用者の立場で――

任期一年の客員教授として、四月以降のわずかな経験から、一・二の印象を卒直に述べることにする。日ごろ学生を相手にすることに慣れ切っているので、学生がいない静かさは有難いが、押し寄せて来るものがないので物足りない感じもする。しかし本館には、利用者というものがある。学生に代るものは利用者と、そう単純に割り切り、私自身もその立場に成り切ることにした。その点で何が好都合で、何が不都合であるか、そういう「ユーザーの声」を挙げてみる。

参考図書・雑誌の開架は、ここ数カ月の間にも、著しく改善されている。これがそのまま、私の居る金沢にあれば、数倍の利用者があろうと思うが、東京はいいものがいろいろあるから、この程度では驚きもせず、喜びもしないのであろうか。しかしこういうものは、利用者の数を問題にするよりも、国文学研究施設の模範というか、モデルというか、そういうものを示すということに意味があろう。限定されたスペース従って限定された冊数の中で、何をどう整備したらよいかということである。これは大事なことだと思う。

しかし私個人にとって嬉しいのは、マイクロ資料、特に紙焼本の開架である。これは本館の目玉商品だと思っている。特に嬉しかったのは「弓継」の発見である。個人的な関心に片寄りすぎるが、以下この本のあらましについて、参考までに記しておこう。

浄瑠璃の「弓継」は、五部の本節（ほんぶし）の一つである（「鸚鵡か杣」序）。古典的浄瑠璃の中でも、オーソドックスなものということになろうか。浄瑠璃のごく初期のもので、滝野勾当の節付けともいう（「色道大鏡」巻八）。現在残っている本は、

A　若狭守藤原吉次（左内）正本「ゆみつき」　正保五年正月　京板　天理図書館蔵　「古浄瑠璃正本集」第一所収

B　奈良絵本「ゆみつき」（下巻のみ）　天理図書館蔵

C　奈良絵本「ゆみつき」（上下二冊）　慶応義塾図書館蔵　「古浄瑠璃正本集」第一所収

D　奈良絵本「ゆみつき」（上下二冊）　龍門文庫蔵　笹野堅「室町時

代短篇集」所収

E　奈良絵本「ゆみつき」（三冊）　東大国文学研究室蔵

がある。Aはやや新しく、五部の本節時代のものではなかろう。BはAによく似ていて、若狭守（左内）のものか、それに近い。C・Dは古態を存していて、五部の本節の一つのように思える。しかし、詞章は中世の語り物に非常に似ているので、果して浄瑠璃かどうかの判断は、これだけではむずかしいところがある。ただ中世の語り物と近世のそれとの接点に立つものであることは、ほぼ間違いない。

最後のEが初めに述べた、本館の「弓継」であって、これをDと合せながら読んでみると、Dとともに最も古態を存した語り物であり、しかもDよりも詞章がよく整っている。つまり語り物を正確に筆写しているといっていい。その点で現存最良の本である。「図書総目録」にも載っていないので、その存在を知らなかったが、これは本館のおかげで、有難く思っている。

この本は黒川真道旧蔵本であるが、市古館長によると、東大に入る時すでに絵は切り取られていたという。従って奈良絵本としては値打の低いものであるが、紙焼本ではその部分が空白（白紙）になっていて、事情を知らないと、どうしてそうなったのか不審に思うし、不安でもある。しかも読んでいくうちに、文章の続かないところが出てくる。大阪市大の阪口弘之氏にお願いして、原本について調べてもらったが、原本には落丁等の欠陥はなく、こちらの撮り落としであることが分った。

ほかにも読んでいて、有難く思った本がいくつかあるが、もう一つ例を挙げると、仮題「照日の前」という珍品がある。主人公の名を題名にしたのであるが、本文に則していえば「てる日の姫」である。これも原本は東大国文学研究室にあり、奈良絵本二冊である。第一冊から読んでいくと、前の部分の欠けていることが直ぐ分る。第二冊を読むと、第一冊に続かないことが分る。読み終ると第一と第二が逆になっていることが分る。しかもその前にもう一冊分あるはずで、三冊のうちの二冊という端本であることも分る。

これは中世の語り物で、内容的には「明石の三郎」（天理図書館蔵）に比較的似ている。慶応の松本隆信氏に聞いても、ほかにない貴重なものである。「明石」は後に浄瑠璃として語られているが、これも同様ではなかろうかと思って、それらしいものを捜しているが、まだ見付からない。丹波少掾の「日本大王」（従って播磨少掾の「日本王代記」）の照日の前、加賀掾の「三社託宣」の照日の前は、いずれも別人であろう。新刊の「義太夫年表」によると、享保二年九月二十八日豊竹座上演の「照月前都姿」がある。その説明に「天理図蔵『鎌倉三代記』の絵尽の異本に混入している二丁分は、本作と推定されているが、なお問題が残る」とある。この天理の本は見ていないが、果してどうだろうか。

本館の「照日の前」は多分女性の語り物であろう。てる日の姫と右兵衛の佐としすゑの悲恋物語であるが、終りはめでたくなっている。右の主人公を浄瑠璃姫と御曹子に置き替えれば、三河に対して播磨の「十二段草子」ともいえそうな作品である。そういう濃艶な語りの部分がたっぷりある。「かるかや」の「高野の巻」に相当する部分もある。これも珍

しい。特に加古川から、天王寺・奈良を経て、伏見の里に至る道行は、相当長いものであるが、いかにも中世的である。

本館の紙焼本は、第一と第二が逆になっているのであるが、写真で見ると東大の方の登録番号が写っていて、ミスはこちらの側にあることも分った。さらに阪口氏の調査によると、原本には帙が付いていて、その題簽には「照日の前寛文項写奈良絵本中下二冊」と墨書してあるという。これをなぜ写しておかなかったのか。たった写真一枚のことであるのに、と思うのである。注

たまたま気を付けて見たものに、以上のようなミスがあったが、ほかにも相当ありそうである。撮影の際のブレのために全く読めないもの、裏側がうつって読みにくいもの（裏側が見えるのは、本の自然を示してよいのだが、それも限度がある）、付箋があるために、その部分の本文が読めないもの等、挙げればいくらもある。ポジフィルムは見ていないが、恐らく似たような欠陥があろう。

これは草創の時の不慣れな仕事であり、短時間に大量の撮影をしなければならなかった特別の事情もあろう。それに欠陥品であっても、食料品のように、今直ぐに重大な結果を招くというものではない。それどころか無いより有った方がはるかにいいのであるから、急にどうこうする必要もない。ただこの事実をふまえて、考えておくことがありそうである。

第一に、右に挙げた「弓継」や「照日の前」は、東大研究室の本であるから、あらためて撮り直しや撮り足しができるかもしれない。しかし、中には、それができないものもありはしないか。時間がたてばたつほど、そういうものが増えてくるだろう。だから一回のチャンスを大切にし、仕事は慎重にやらねばならない。ある蔵書家は、本を見せるということはご馳走であるから、むやみに見せたのではご馳走にならないと言う。私は数回足を運んだが、一度だけ絵巻物一つを借りたにすぎない。それも他地方の人の依頼があったからで、異邦人でない私は、ご馳走の要はないと考えたのであろう。そういう考え方の人もあって、蔵書の撮影まで事を運ぶには、相当困難な場合がある。いわゆる物分りのいい、所蔵者ばかりではない。特に図書館・文庫といった大口は次第に望み薄になるだろう。だからいよいよワンチャンスを大事にしなければならない。右に挙げたいろんなミスも、写真屋のせいか、調査員のような立場の人が不十分なのか、それとも本館に問題があるのか、考えねばならねことである。

第二に、紙焼本（フィルムも同じであるが）を読んでいて、不審にぶつかった場合（例えば零本のため、あるいは落丁のため、本文が続かないといった場合）、それを説明するものがないのは不自由である。また不親切である。結局もう一度原本に当たらねばならない。しかしそれができない場合が多いのである。国語、国文の研究は、正確な翻刻で大抵間に合う。影印でほとんど間に合う。原本を必要とするのは特殊な場合に限られる。原本は、それも稀覯本の場合は、本の保存のためにも、それに手をつけない方がよい。そのためにもマイクロ資料には、解題を付けることが必要になる。それは読者へのサービスということもあるが、そ

れ以上に原本の保存という点で意味を持ってくる。

私が承知しているところでは、天理図書館では、善本叢書に載せた本は、閲覧を禁止している。龍門文庫は、閲覧を春秋数日間に制限している。いずれもその蔵書を保護するための措置であろう。昨今の状況――国文学の研究者が急増し、それが同時に書物破損の犯人とならざるをえない状況では、ある程度の制限は、当然なことである。その点で掛け替えのない書物の保存――現状維持ということには、所蔵者のみの努力では不十分である。本館もその本来の任務からいって、所蔵者を助けて（本館も所蔵者であるが）、長期的に何ができるかを考えねばならない。そのためにも右に述べたように、マイクロ資料に行き届いた配慮がなされ、本館の写真と解題を見れば、特に原本を見る必要がないといえるものを提供する必要がある。原本の所有者も、閲覧は本館の写真にまかせて、保管に責任を持つという、相互依存の状況を作ることが望ましい。その点で本館が指導力と説得力を持つには（それを切に願うのであるが）、自らのところで確かな仕事をやって置かねばならない。マイクロ資料の整備は、その面でこれからの大きな事業になるだろう。

この事業は恐らく当館の設立以前から、目的の第一として考えていたと思う。ところが最近は別の所で矢継ぎ早にそれをやってのけ、本館のお株を奪わんかの勢いになってきた。複製本も数多く出たが、天理図書館・大東急記念文庫・岩崎文庫・静嘉堂文庫・東大・京大を初めとする大学、それに勉誠社・雄松堂書店・波右書院等が、それぞれタイアップし、あるいは独自に、善本の影印本・マイクロフィルムを続々と刊行している。この傾向は今後もとどまることはあるまい。当館はこの情勢を考慮に入れながら、独自の事業として何をやるか。当然営利に合わない方面の、しかも研究者を初め、国文学に関心を持つ人々に、有難いと思われることでなければならない。急がねばならないものもあろうし、気長にやらねばならねものもあろう。調査・収集（撮影）といっても、一冊二冊の本を追うて、高い旅費を使わねばならぬということが、次第に多くなってくるのではないか。またそれとともに、一冊〳〵についての地味な研究を、長期的に継続し、その成果が万人のものになるような努力が期待されるのである。

当館に対する期待は大きいのであるが、最後にその一つを挙げるとすると、地方へのサービスということである。「東京の」国立国文学研究資料館であっては困るということである。「資料利用案内」の「奉仕内容」の欄を見ると、閲覧・複写・レファレンスサービスのほかに、紙焼写真本の一夜貸しという面白いのがある。これは戸越銀座から余り遠くない人々は、その恩恵に浴するだろうが、地方の住人には及ばない。紙焼本のごときは、二部以上作って、どんどん貸し出していいのではないか。これは小さい事であろう。しかし地方から見る当館は、ただ取るばかりという感じを持たれている。特に蔵書家の例からすると、多額の撮影料や掲載料を要求する事例が多くなっているから、ただ研究のためという名目では、必ずしも積然とするものではない。そこにむつかしいところがある。

やはりその研究の実を示し、それが各地に均等に行きわたることが必

要であろう。具体的には、東京でも地方でも、同じ値段で自由に買える物を公刊することである。それは国文学についての情報であり（例えば「国文学年鑑」は本館にふさわしい事業である）、資料に関する基礎的研究の成果である。「国書総目録」の増補改訂であってもいいし、他では出せない善本叢書等、いろいろアイディアはあろうが、要は永続性のあるものを、手近かなところから、早く始めて欲しい。それはいい意味の宣伝にもなり、地方の当館に対する信頼感を深め、結果的には本来の目的にスムーズに到達しうる近道になりそうである。

（第四室　室木弥太郎）

注

当初は御指摘のような事実が確かにあったが、その後、帙や袋も撮りもらさぬように仕様を変更している。（文献資料部）